犬山市立図書館×名古屋経済大学図書館連携事業

天才の着想や思索を辿る
貴重資料 ダ・ヴィンチの『手稿』を特別公開

犬山市立図書館 所蔵
『パリ手稿』

『解剖手稿』
名古屋経済大学図書館 所蔵

レオナルド・ダ・ヴィンチ展
―没後500年―

11月16日(土) ～ 12月20日(金)

ダ・ヴィンチの絵画の一部になろう！記念撮影用・顔はめパネルあり

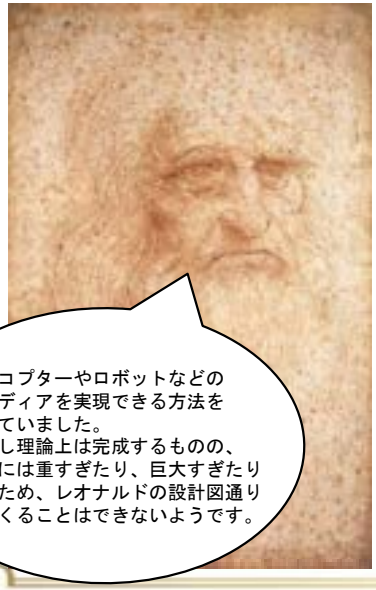
ダヴィンチクイズで、ダヴィンチの世界を楽しもう！

ぬり絵(犬山市立図書館のみ)であなたもダヴィンチ！

犬山市立図書館 Tel 0568-62-6300
〒484-0083
愛知県犬山市大字犬山字東古券３２２番地１
開館時間：10:00~18:00
休館日：毎週月曜日(祝日・休日の場合は、直後の平日)

名古屋経済大学図書館 Tel 0568-67-3798
〒484-0000 愛知県犬山市字橋爪６１-２２
開館時間：平日 9:10～20:00 土曜日 9:10～16:30
休館日：毎週日曜日・祝日・振替休日
（事情により臨時に変更することがあります。開館前にホームページでご確認ください。）

レオナルド・ダ・ヴィンチ



ヘリコプターやロボットなどの
アイディアを実現できる方法を
考えていました。
しかし理論上は完成するものの、
実際には重すぎたり、巨大すぎたり
するため、レオナルドの設計図通り
につくることはできないようです。

（ 1452-1519）

イタリア・フィレンツェ生まれ。『モナ・リザ』などの絵画だけではなく、建築や舞台演出、科学や軍事技術の研究を行っていた。

対象を綿密に観察し手稿に残している。興味の対象は人間だけでなく、動物や草花、想像上の生き物などあらゆるものに及ぶ。人体の構造に関して近代的な考えをもっていたが、キリスト教的観念から外れたことは隠していた。ルネサンス期のなかでも斬新な考えをもって活動していたため、不遇の時代もあったものの、晩年には権力者から認められ、フランスにて67歳で没。

ルネサンス期の美術

中世以前の美術
キリスト教布教のため、厳粛で威厳がある宗教画が製作されていた。
また文字が読めない人のため、人物を図像化。

尊敬

リアルな人物描写
リアルを追求した人物描写と、バランスの良い構図を、対象の観察と科学的な計算で描いた。

ギリシア古典の引用
当時研究が進んであった古代ギリシアを作品に引用することで美しく荘厳な作品を製作。

サンドロ・ボッティチェリ
(1445-1510)
代表作：
『ヴィーナスの誕生』『春』

レオナルド・ダ・ヴィンチ
(1452-1519)
代表作：
『モナ・リザ』
『最後の晩餐』

同じ工房で働いていた(？)

ミケランジェロ・ブオナローティ
(1475-1564)
代表作：
『ピエタ』
『アダムの創造』

裏に回し対比するところがある

ラファエロ・サンティ
(1483-1520)
代表作：
『アテナイの学堂』
『美しき女庭園』

優美かつ人間的
バランスのとれた構図や、理想的で温かみのある描写など、二人の芸術の良いところを受け継ぎ、西洋絵画の模範となった。

理想的な人体美
理想的な美しい人体と筋肉を強く表現。キリスト教の壮大な絵画も残している。

芸術の変化
対を成した強大な権力者(パトロン)が、私邸を飾るため華やかな絵画を求める。「宗教画を描く人」＝「教会関係者」であったのがさまざまな仕事を請負う「工房」へ。など社会構造の変化により芸術家に求められるものが変化。芸術家の社会的地位は権力者との関わり深くなるにつれ向上。

パトロン
(ロレンツォ・デ・メディチ)

ローマ教皇

誰でもできる

西洋美術鑑賞 3つのテクニック

その1 主役を見つけよう

Q. この絵の主役は どこでしょう？

★ポイント★

・真ん中にあったり、他と比べて大きかったり色が違ったり、とにかく目立っているもの

・コントラストがハッキリしている部分

・視線を誘導するラインの先にあるもの

A. 主役は右奥の小さいマリアです
手前に大きく描かれた女性が視線誘導に一役買っています
司祭も準主役といえるでしょう

ティントレット『マリアの神殿奉献』1553-1556年

その2 色を楽しもう

★ポイント★

・明るさや鮮やかさ、影の入れ方で印象をとらえる

・色の取り合わせはどのようになっているか考えてみる

【色相環】
色は光の波長の違いによって、赤・橙・黄、緑・青・紫というように連続的に変化して知覚されます。これを円環状にしたものが下図です。

色の取り合わせは大きく3つ！
・互いの個性が際立つ色（赤・青・黄の三原色）
・似たものの同士の色
（緑と黄、赤とピンクなど隣り合う色）
・互いに引き立てあう色
（青と黄、赤と緑など反対に位置する色）

やや暗い感じだが、人物は鮮やかで神々しい印象

レオナルドを常のスフマート（物体の輪郭を線ではっきり描かず、周囲の空間との境をぼかして描く技法）で影が表現されています

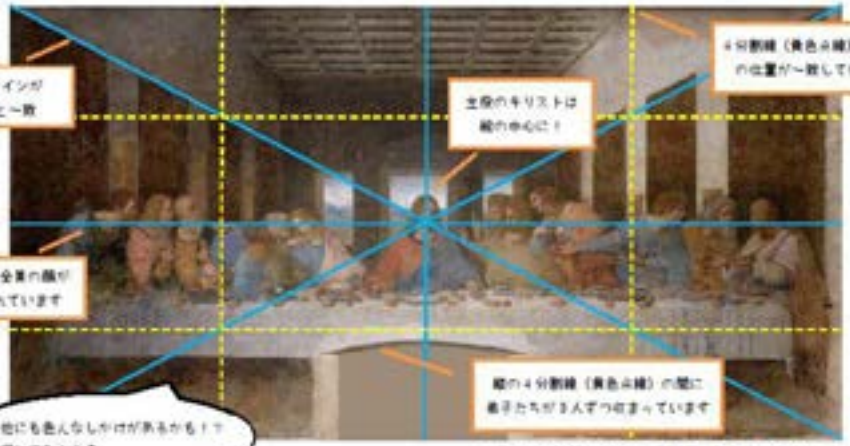
衣装で使われている赤・青・黄が互いに際立っています

レオナルド・ダ・ヴィンチ『岩窟の聖母』1483-1486年

その3 構図を読み取ろう

★ポイント★

十字線や対角線、等分割線などを画の中で引いてみて、人物や物体がライン上や線の中にどう配置されているかバランスを見てみる



他にも色んなしかけがあるから！？探してみよう♪

レオナルド・ダ・ヴィンチ『最後の晩餐』1495-1498年

ウィンザー城王室図書館蔵

『レオナルド・ダ・ヴィンチ 解剖手稿』

レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1519)の現存する手稿の数は、約6,300ページあると言われていて、英国ウィンザー城には、解剖手稿153紙葉、その他の素描463紙葉が収蔵されています。

英国王室のエリザベス2世(Elizabeth II, 1926-)は、ウィンザー城に所蔵するレオナルドの手稿・素描について、国際共同出版により、完璧な複製(ファクシミリ)を作製する特別の許可を与え、写真撮影、色分解及び校正などの工房が城内に設置されました。

この国際共同出版の第1回が『解剖手稿』です。解剖学に関係する原本の複製は201紙葉あり、「キール・ペドレッティ番号」による年代順配列となっています。

『解剖手稿』は、1480年代から1513年までの約30年間の作品で、事実上独力で人体の構造を探求した記録です。当時、画家が解剖に参加することは珍しくなかったのですが、現実の解剖はレオナルドが予想したほど簡単なことではなく、彼が残した図に付された/ートからは、剖出作業に難渋した様子が伺えます。

「いかなる文字を用いれば君は、この図が示すのと同じくらい完璧に、全体の形状を記述できるというのか、…人々の眼にでなく、耳に向かって言葉で示したいと望むなら、実体とか本性についての事柄を話せばいいので、眼にかかわる事柄を耳から入れようなどと思いわずらってはならない」という/ートに、解剖学の記載には優れた図解が不可欠である、という彼の考えが示されています。

原典を注解した医学史家ケネス・D・キールは、レオナルドの解剖図を、1)権威の見解を説明したもの、2)ヒトと動物の合成図、3)想像的模型的描画、4)観察の記録、の4群に大別しています。

日本語版は限定350部刊行され、本学が所蔵するのは第211番です。

岩波書店 1982年刊。全3巻別冊1. 原典翻刻・注解: ケネス・D・キール, カルロ・ペドレッティ, 日本語版監修: 山田致知

20recto, 21recto (『解剖手稿』より)

上の紙葉では、後頭部の隆起から耳介[外後方に飛び出している外耳]までの距離は、下唇から頤[顎先]までの距離に等しいという比例関係が示されています。

下の紙葉では、頭と胸が幾何学的に一つの正方形と三つの正三角形によって図化されています。それぞれの図形のすべての辺は同じ長さです。

27recto, verso (『解剖手稿』より)

古代ローマ時代の建築家マルクス・ウィトルウィウス・ポッリオ(紀元前80～70頃-紀元前15以降)の『建築について』の記述をもとに、レオナルドは1485-1490年頃に『ウィトルウィウスの人体図』を描きました。

上の紙葉では、跪いた時と座った時に身体各部の比例にどのような影響があるかについて注意を払っています。レオナルドが標準としたのは、身長は両腕を伸ばした長さに等しいという『ウィトルウィウスの人体図』です。

下の紙葉では、「肘尺[肘頭から中指尖までの長さ]は人の身長の4分の1」、「一方の肩の関節から他方の関節までは頭2つ」などと述べています。

35recto (『解剖手稿』より)

レオナルドの解剖図のうち最も有名なものの一つで、性交図です。解剖探求の初期の段階であり、多くの神経が脊髄から出て陰茎に達するというイタリアの医師モンディーノ・デ・ルッツィ(Mondino de Luzzi, 1270頃-1326)の説をそのまま図にしたものです。

モンディーノは、人体解剖を行いながら解剖学の講義をする教育法を始めました。解剖学の教科書も書きましたが、内容は、ヨーロッパの医学に影響を及ぼしたギリシアの医学者ガレノス(Γαληνός 129-199頃)の学説を踏襲したものであり、多くの間違いがそのまま残されていました。

36recto (『解剖手稿』より)

レオナルドは、この図に「静脈の樹」と題を付けています。静脈は広義で血管を意味することが多く、彼は動静脈の起源は心臓にあると断定し、心臓を「桃の種子」にたとえ、「心臓は静脈の樹を生み出す種子である」と/ートに書いています。

ルネサンスまでの1500年以上にわたり、ヨーロッパの医学に影響を及ぼしたギリシアの医学者ガレノス(Γαληνός 129-199頃)の学説が説く血管系をそのまま図にしたものですが、浅層の血管を入念に描いています。

112verso（『解剖手稿』より）

右下肢の大伏在静脈[下肢全体にわたって続く皮静脈]の図です。

レオナルドは大腿部の静脈経過に有蹄類のような伴行静脈[体内の深いところで、動脈に隣接して走る静脈]を描き、また大腿静脈への合流型式でも混乱を見せています。

頭部の図では、頭蓋骨の上半（頭蓋冠）を図のように除去すると、頭皮弁が頸と顔面にかぶさるように垂れ下がっています。レオナルドは、さらに前垂れ様の肉垂を描いています。

122recto（『解剖手稿』より）

レオナルドの解剖図のうち最も有名なものの一つで、女性の内臓図です。胸部と腹部の内臓を探求しおえた時に描かれたものです。

レオナルドは、いつも分析と統合とを同じくらい大切にしましたので、内蔵を自然の位置に置いた全身図を描いたことは理解できます。

この内臓図は、正確というには、ほど遠いものですが、レオナルドが内臓図の解剖学体系を重要視していたことが伺われ、解剖学史上、偉大な業績と考えられています。

142verso（『解剖手稿』より）

レオナルドの時代は、解剖学の学術用語は無いに等しく、筋の分類なども体系をなしていません。その中で、彼は、筋束[筋線維の束]の配列や腱の形による分類を試み、4種を区別しています。[筋肉の一種に、腱に始まり腱で終るものがあるが、これはさらに2つの種類に分れ、一つは拡がって軟骨（腱膜）に変化した腱を持ち、もう一つはロープ状の丸い腱を持つ…第2の種類の筋肉においては、片側のみに腱を持つが、これはさらに2種に分れ、その一つは薄い軟骨（腱膜）の形に拡がった腱を持ち、その2は丸みを帯びたままである…]（ノートより）

レオナルドは、顔面の表情筋を「怒りの筋肉」、「苦痛の筋肉」などと命名しています。

144verso（『解剖手稿』より）

この紙葉は、レオナルドの解剖記録全体を通じて最も内容豊富で、価値の高いものですが、それはまた、こんな順序で理解が進んだのではないかと推理して示そうとすると、最も難渋するページでもある、と言われています。

レオナルドは、単なる筋の記載だけでなく、腋窩[わきの下]とその内容から自由上肢[腕]全体を考察し、関連した肩などの描画を紙葉で補足し、彼の到達した結論を縦横に示しています。

174recto（『解剖手稿』より）

青色の紙面に褐色インクを使っています。

紙面上部の影に関するノートでは、レオナルドが以前に光と影、遠近法および視覚の生理学について行なった仕事が数多く引用されています。特に重要なのは、(1)影も光も波動によって眼やその他の物体に衝撃を与える、(2)物体の縁は決して明瞭な線には見えない、という点です。

紙面下部は、心臓の収縮と拡張についてのノートです。収縮する心臓や、体内における心臓の平衡の問題を述べています。

179verso（『解剖手稿』より）

レオナルドは、解剖探求の初期から頭部の平衡と安定の機構に大きな関心を寄せていました。

しかし、彼は晩年になると解剖を図説する能力が衰退していたのか、この紙葉では、機械的原理を図説するだけで、解剖上の細部については、関心が無くなっているようです。

この図では、頸部に作用する筋の力と、船のマストを支持する索具とが比較され、誤った図説がされています。

184recto（『解剖手稿』より）

この紙葉の解剖学的中心主題は、鳥の翼です。

着想の流れは、井戸の水を汲み上げる仕掛け、往復運動を起こす滑車から、鳥の翼の構造の研究に到達します。船の喫水下の空間などの考察もあります。

レオナルドは、水中における魚や船や人間の運動を空中における鳥の、あるいは人間の運動と比べることを思いつき、比較を繰り返しています。

「水泳ぎは、空中で鳥のすることを人間に教えてくれる」というのがレオナルドの基本的な法則です。

ウィンザー城王室図書館蔵
『レオナルド・ダ・ヴィンチ 素描集 第I輯 風景、植物および水の習作』

英国ウィンザー城に収蔵されているレオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1519)の遺作は、16世紀の末近く、彫刻家ポンペオ・レオーニ(Pompeo Leoni, 1533-1608)が白紙に貼付して造本した大著に由来し、全体では600点を越す素描および手稿のページから成り、それには200枚ほどの解剖ノートが含まれています。

『解剖手稿』以外の素描の編集計画は、次の4グループに再整理することから始められました。(1)風景およびその他の自然を扱う習作、(2)馬および他の動物、(3)戯画および衣紋を含む人物の習作、(4)その他の紙葉として、紋章、科学上のまた工学技術上の研究、建築および地形図法が含まれます。

この素描集第I輯は、各輯約80枚の図を収録する全4輯の最初の輯です。

日本語版は限定300部刊行され、本学が所蔵するのは第194番です。

岩波書店 1985年刊。 原典翻刻・注解: カルロ・ペドレッティ, 日本版監修・翻訳:裾分一弘, 翻訳:高階秀爾, 若桑みどり, 斎藤泰弘

1recto（『素描集 第I輯』より）

この紙葉は、最初は幾何学研究のみを扱う予定でした。中央の大きな二等辺三角形とそれを包む円弧の図形が、おそらく最初に描かれ、次に下辺左の円と三角形の重なり合う図形が描かれました。

レオナルドは、幾何学上の問題を考えている間に、やがて形のあるイメージの方に次第に移行して行ったようです。中央左に、古代的な衣装をまとって右横顔を見せる老人の半身像が描かれていますが、その衣装の背面の襞とちょうど重なるように、幾何学図形が見られます。図形の線はさらに左に突き出して、岩山の斜面となります。

16recto（『素描集 第I輯』より）

レダを題材にした絵画のための植物習作で、最も有名なものの一つです。星形の花と長くて細いねじれた葉を持つ、通称「ベツレヘムの星」(オオアマナ)と、ウマノアシガタ属の植物、アネモネ属の植物、トウダイグサなどが描かれています。

レダは、ギリシア神話の女性です。ゼウスが白鳥に変身し、スパルタ王テュンダレオースの妻であるレダを誘惑したというエピソードは、西洋の彫刻や絵画などにおける題材となっています。レダからヘレネーが生まれました。ヘレネーは後に「トロイのヘレン」として知られることになります。

31recto（『素描集 第I輯』より）

レオナルドの弟子による、町中の運河の風景です。左側に家や水車小屋があり、右側に傾斜した岸が描かれています。人々が岸辺や前景の2隻の小船にいて、右側では馬上の人物が馬を水に乗り入れています。

レオナルドの風景画や植物習作は、しばしば彼の弟子たちの作品に反映しています。それらの作品は、彼自身の素描の模写か、あるいは彼の指導のもとに作成されたオリジナルな習作と考えられています。この紙葉の裏面には、レオナルドによる解剖研究が描かれています。

33recto（『素描集 第I輯』より）

起伏の多い風景に樹木や尖塔が点在し、背景の左側には岩山が連なり、上空には巨大な積雲が描かれています。

長く、レオナルドの作と見なされてきましたが、今日では、彼の弟子フランチェスコ・メルツィ(Francesco Melzi, 1491-1570)が描いたものと考えられています。メルツィは、ロンバルディアのミラノ貴族の家に生まれた画家です。レオナルドの重要な弟子で、彼の遺産を後世に伝える役割を果たしました。

34recto（『素描集 第I輯』より）

樹木(おそらく カプリイチジク)の習作です。こぶだらけの幹がまっすぐに伸び、そこから枝が出ています。1本の若枝が根元から直接生えていて、何本かの枝は途中で折れ、葉はかすかに示されているだけです。

長く、レオナルドの作と見なされてきましたが、チェーザレ・ダ・セスト(Cesare da Sesto, 1477-1523)の素描です。彼は、レオナルドのミラノ時代の最もオ能豊な弟子の一人です。彼はペルッツィ(Baldassarre Peruzzi, 1481-1536)やラファエロ(Raffaello Santi, 1483-1520)とも交際がありました。

42recto（『素描集 第I輯』より）

右上方の2つの習作は、異なった角度に立てられた木製の板によって、水流がどのような変化を起こすかを示しています。その脇を流れる水はそれぞれ異なった型の波と渦を作っています。

中央には四角い出口から濠の中に噴出する水の束が作り出す菊花状の習作です。渦巻く水と泡は、さながら透明な立体模型のように図式的に表現されています。

レオナルドは、早くから水力学と運河の開削に関心を抱き、それが彼に、水流と治水についての組織的研究の決意を促したようです。

45verso（『素描集 第I輯』より）

女性の頭部と肩の習作です。目を半ば閉じ、かすかに右を向いています。

この素描は、レオナルド自身が軽くスケッチした上に、弟子の一人が赤いチョークの鈍重なタッチでなぞり、陰影の線を配したものと思われます。その顔は、滝のように落ちる巻毛によって縁取られて、まさに渦巻く水を想い起こさせます。

48recto（『素描集 第I輯』より）

老人は、岩棚に腰をかけて足を組み、頭部を左手にもたせかけ、右手を杖に休めて瞑想にふけっています。彼の背後には小さい木があり、右の背景には、遠くに岩の土手に囲まれた河の眺望が暗示されています。右側には、頭髪に似た渦巻く水の習作4点と、水の運動と頭髪との類似性についての考察が記されています。

この老人は、しばしば理想化した自画像と考えられていますが、この紙葉が描かれた1513年当時のレオナルドの年齢である61歳よりも、はるかに年老いた男であり、自画像ではないようです。

54recto（『素描集 第I輯』より）

この紙葉は、謎めいた素描として有名です。

増水している川の眺望、岸辺の水際には、地面に埋まるように地球儀が置かれていて、頭上に王冠をいただいた紋章的な威厳を持って光り輝く鷲が乗っています。茂った木(オリーブ)をマストにした舟には犬が一匹すわっていて、舟を操縦しています。羅針盤の針から発する光線はまっすぐに鷲の心臓に向けられています。舟、マスト、動物、羅針盤、鷲、地球儀を、それぞれ教皇、皇帝、フランス国の権力、メディチ家、スフォルツァ家あるいはボルジアー族などの象徴的表現であるという解釈や、ミラノ人に対するフランスの政策の一端を象徴したものという説などがあります。

55recto（『素描集 第I輯』より）

この風景の中に立つ『指さす女性』の素描は、16世紀当時すでに有名であったと考えられます。

レオナルドの弟子フランチェスコ・メルツィ(Francesco Melzi, 1491-1570)が描いたと思われる模写があり、バロック期のフランドルの画家ルーベンス(Peter Paul Rubens, 1577-1640)の『毛皮をまとったエレーヌ・フールマン』にも、この素描の影響があるという説もあります。

ルーベンス『毛皮をまとったエレーヌ・フールマン』

ウィンザー城王室図書館蔵
『レオナルド・ダ・ヴィンチ 素描集 第II輯 馬および他の動物』

「この素描集において、レオナルド・ダ・ヴィンチは、人馬の間の特殊な関係を生き生きと伝えている。他の諸動物は珍奇な生命として描かれているにすぎないが、馬については、明らかに共感と注意をもって個性ある生命として研究され描かれているのである。人馬を扱うこれらの素描は、制作の上からは一個の全体をなし、馬と騎手との間の物理的、気質的な親密な関係の正確な反映である。これらの素描のすべては、この芸術家の天分のもうひとつの面を示している。」(本書に寄せられたエディンバラ公殿下(Prince Philip, Duke of Edinburgh, 1921-)の序文から)

この素描集第II輯は、各輯約80枚の図を収録する全4輯の2番目の輯です。

日本語版は限定120部刊行され、本学が所蔵するのは第098番です。

岩波書店 1990年刊。 原典翻刻・注解: カルロ・ペドレッティ, 日本版監修・翻訳:裾分一弘, 翻訳:高階秀爾, 三神弘彦, 斎藤泰弘

71recto（『素描集 第II輯』より）

馬を扱うレオナルドの最初期の素描は、すべて2点の礼拝図のための習作です。

1点は、『羊飼いたちの礼拝』であり、彼はそれに1478年に専念したようです。もう1点は、『三王礼拝』であり、これはフィレンツェの近郊、ピサへの途上、サン・ドナート・ア・スコーペト僧院のために1481年に委嘱された祭壇画と同定されます。

この紙葉は、中央に、顔を左に向けて横たわる驢馬の習作です。その右に去勢牛、左に人を乗せて歩を進める驢馬、下辺に2頭の驢馬が描かれています。

78recto（『素描集 第II輯』より）

レオナルドの素描に空想的な動物が現れるのは、初期の礼拝図を扱う習作の時期です。

この紙葉は、下辺右に、打撃に尻込みするかのように、後退し始めている竜、その左に、攻撃のために舞い降りている竜などが描かれています。

竜との闘いのテーマは、礼拝図『三王礼拝』のためのレオナルドの習作と関連して現れます。レオナルドは、なぜ聖ゲオルギオスと竜との闘いの外典説話[キリスト教の聖人伝説をまとめた『黄金伝説』には数多くのドラゴン退治物語があり、聖ゲオルギオス伝承もその中に記載されています。]を礼拝図の一部と考えたかという点については、その説話が一つの寓意と解釈されない限り明らかではありません。

88recto（『素描集 第II輯』より）

レオナルドが、馬に関する解剖学と比例(プロポーション)とを扱った書を編んだことが知られています。この書は、スフォルツァ騎馬像のための習作が生まれる中で一緒に編まれ、1499年にフランス軍がロンバルディアに侵入した際に、粘土の馬像原型と共に消失したということです。

この紙葉は、馬の全身を描いた習作です。胴体には計測のためか、区分ごとに分割線が引かれています。

89recto（『素描集 第II輯』より）

中央の折り目が紙葉を二分しています。

上半分は、天地逆さの向きで、右横向きに立つ馬の後軀と後脚の薄れた習作があり、下半分には、左横向きの馬の全身の習作があります。各区分には分割線が引かれ、計測値が記入されています。

下半分の馬の頭部の脇には、次の覚書があります。

高さと幅は頭2と$\frac{16}{10}$

筋肉 4, 5, 3

同じ高さである。

94recto（『素描集 第II輯』より）

左横向きの馬の左前脚と肩の習作で、脚は引き上げられ、しかも曲げられており、ひづめは上に向けられています。計測された各区分に分割されています。

中央の上には、「ガレアッツォ殿のチチリアーノ」という覚書があり、この馬が、ミラノの軍人ガレアッツォ・ダ・サンセヴェリーノ(Galeazzo Sanseverino, 1458-1525)の持ち馬であることが分かります。

この紙葉の筆跡は、レオナルドが1490年にスフォルツァ騎馬像の馬に関する仕事を再開したと述べている『パリ手稿』の覚書に類似していることから1490年ごろに描かれたものと考えられます。

99recto（『素描集 第II輯』より）

30歳のレオナルド(1452-1519)が、ロドヴィコ・スフォルツァ宛に、建築家および技師として彼のために働きたいという手紙を書いた時、レオナルドは自分が熟達した画家であり、熟練した彫刻家であることも公言しました。スフォルツァ家を記念して騎馬像を造るという構想は、1460年代から検討が進められていましたが、1480年にロドヴィコがミラノに帰還した時に計画が復活しました。

この紙葉の馬の習作は、レオナルドがスフォルツァ騎馬像の仕事を再開した1490年ごろに描かれたと考えられます。

106recto（『素描集 第II輯』より）

騎馬像形式の記念碑の習作です。すばやい筆致で略書きされている倒れた1人の敵は、引き上げられた馬の前脚の下で、ひづめをかわすべく盾を振り向けています。

スフォルツァ騎馬像のためのレオナルドの習作における第一の局面に属する素描で、その後、彼は、この激しい動きを持つ群像の表現を放棄し、パレードの場合と同様の歩行する馬に跨った傭兵隊長(condottiere)という伝統的なイメージに変更することに決めました。

112recto（『素描集 第II輯』より）

紙面中央上部から真中まで、およびその左側にかけて、爪車装置、伝動装置、および重量物を持ち上げるための滑車装置の習作です。それ以外の部分には、鋳造装置の習作と、次の覚書が書き込まれています。

右上: 水を自由な状態にしておいたとしても、自分より低い空気を見つけない限り、場所を移動することはないだろう。…(以下略)

下: 食欲なくして食べることが消化不良に変わるように、意欲なくして勉強することは記憶力を損ない、記憶したことを保持しない。

116/117recto（『素描集 第II輯』より）

「レオナルド・ダ・ヴィンチの馬たち」、「レオナルドの馬の群れ」、1510年にフィレンツェ案内書を出版したフランチェスコ・アルベルティーニ(Francesco Albertini, 1469-1510)を始めとするレオナルドの同時代人たちは、このような呼び名で彼が1505年にフィレンツェのヴェッキオ宮殿の裏手にある新会議場の壁面に描いた「アンギアーリの戦い」断片図に言及しました。

この紙葉の習作は、「アンギアーリの戦い」の構図に用いられませんでしたが、重要な基礎資料であったと考えられます。

133recto（『素描集 第II輯』より）

1510年ごろに描かれたトリヴルツィオ騎馬像のための馬の習作です。

ジャン・ジャコモ・トリヴルツィオ（Gian Giacomo Trivulzio, 1440or1441-1518）は、青年期の大半を傭兵隊長として活躍し、晩年にはミラノのスフォルツァ家の支配者たちに反抗して主としてフランス人のために活動し、1499年フランス人によるミラノ侵攻に従軍して名声を得ました。その後、彼はフランスの陸軍元帥、ミラノの総督になりました。

レオナルド自筆の、記念碑の経費に関する詳細な見積書が残っています。

151recto（『素描集 第II輯』より）

レオナルドの弟子の一人、チェーザレ・ダ・セスト（Cesare da Sesto, 1477-1523））が描いたと考えられる横たわる牛の習作です。

写生素描で、必ずしもレオナルドの素描の模写ではないと考えられます。1515年ごろ、チェーザレが、まだローマにいてレオナルドと接触していた時期のものです。牛や驢馬などの動物は、ローマ近郊においてはごく自然に見られ、ラファエロ（Raffaello Santi, 1483-1520）も同じような主題の素描を残しています。

153recto（『素描集 第II輯』より）

犬の頭部と胸部、右前脚を真横から描いた習作と、同じ犬の臀部と右後脚を描いた習作です。

レオナルドが描いたとする説もありますが、彼の弟子フランチェスコ・メルツィ（Francesco Melzi, 1491-1570）が描いたものと考えられています。

メルツィの模写は、一般的に、レオナルドの手本を、それが初期のものであっても、レオナルドの晩年の様式で写しています。

156recto（『素描集 第II輯』より）

竜に似た幻想的動物が右の方へ進んで行くところを描いたものです。ステレオタイプ化された中国の伝統的な竜と似ています。中国や日本の竜は、空中を支配する能力を持っていながら、このデッサンのように翼を持っていません。当時の竜のイメージは、翼があって、角が無く、しばしば鱗で覆われているというものでした。

「空想の動物をいかにして自然らしく見せるか」というノートの中で、レオナルドは次のように述べています。「どのような動物を作ってみても、その身体の一部が他の動物の部分とどこか似ていないということはありえない。」

157recto（『素描集 第II輯』より）

猫の習作です。さまざまな姿態の猫27匹と、1頭の竜がいます。猫は、横たわり、眠り、獲物を狙い、2匹でじゃれている時には、その激しい戯れは、本当に争っているように見えます。そしてその動きは、翼の無い竜の大きくねじれた姿に変貌します。ノートには、「屈曲と伸展について　これらの動物の種属の君主は、ライオンであるが、この種属は屈曲に適した椎骨の関節を持っているので…」と書かれています。

このデッサンを描いた晩年の時期、レオナルドは、歩行は常に蛇行運動を示す、という身体のねじれの動きについての極めて重要な研究を、一つの理論にまとめ上げようとしていました。

モナ・リザ展　カタログとチケット

「モナ・リザ展」は、絵画としては、『モナ・リザ』と、『フランソワ一世の肖像』（写し）だけの展示でした。

「ここにモナ・リザは東京を訪れた。…10年前のただ一度の機会［1963年、米国ワシントンとニューヨークでの公開］を除いて大洋を越えたことのない名画」（ジョルジュ・ポンピドゥ仏大統領）

「モナ・リザの日本での公開というわが国の文化史上長く記念すべき催し…全く例外的に、こころよく極東の彼方のわが国にお貸しいただいた故ポンピドゥ大統領」（田中角栄内閣総理大臣）

というメッセージが寄せられました。

69p.　共同編集：文化庁、東京国立博物館、国立西洋美術館 1974年刊

国立博物館ニュース モナ・リザ展案内

「モナ・リザ展」の開会式は一般公開に先立ち1974年4月19日に、上野公園にある東京国立博物館本館の展示会場入口前で行われました。フランス、日本両国歌の演奏にはじまり、田中角栄総理大臣、ラブレー駐日フランス大使の祝辞、テープカットなどを行いました。

観覧料は、大人200円、学生・児童100円です。

一般公開は、4月20日から6月10日までで、入場者数は、1,505,239人でした。

国立博物館ニュース 第324号 1974年5月1日発行

モナ・リザ　絵葉書

モナ・リザ展の会場で、販売されていた絵葉書(50円)です。

宛名面に、「レオナルド・ダ・ヴィンチ Leonardo da Vinci《モナ・リザ》部分 La Joconde 1503～1506 77×53cm, ルーヴル美術館所蔵」とあります。

レオナルドは、フィレンツェの織物商人フランチェスコ・デル・ジョコンドから妻リザの肖像画を依頼されました。イタリア語のma donna(私の貴婦人)は短縮形でmonaと綴られ、リザの名前からモナ・リザと呼ばれています。

世界の恋人 モナ・リザのすべて

レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1519)は、イタリアのルネサンス期を代表する芸術家であり、音楽、建築、幾何学、解剖学、動植物学、天文学、気象学、地質学、物理学、土木工学、軍事学など様々な分野で優れた業績を残しました。

機械分野では、無数の発明をしましたが、その多くが実用には、ほど遠いものであったと言われています。

週刊サンケイ 4月1日特別増刊 日本初公開記念号
産経新聞出版局 1974年刊

参考文献

1) ケネス・D. キール, カルロ・ペドレッティ原典翻刻・注解;裾分一弘[ほか]翻訳. レオナルド・ダ・ヴィンチ『解剖手稿』:ウィンザー城王室図書館蔵. 岩波書店, 1982, 全3巻 別冊1 (名経大 491.1/L55)

2) カルロ・ペドレッティ原典翻刻・注解;裾分一弘[ほか]翻訳. レオナルド・ダ・ヴィンチ素描集:ウィンザー城王室図書館蔵 第 1 輯 風景、植物および水の習作. 岩波書店, 1985, [本巻], 解説目録, 別冊 (名経大 723.3/L55/1)

3) カルロ・ペドレッティ原典翻刻・注解;裾分一弘[ほか]翻訳. レオナルド・ダ・ヴィンチ素描集:ウィンザー城王室図書館蔵 第 2 輯 馬および他の動物. 岩波書店, 1990, [本巻], 解説目録, 日本版索引 (名経大 723.3/L55/2)

4) ダ・ヴィンチ遍歴のあと. 週刊サンケイ. 第23巻, 12号, 54ページ.

5) コスタンティーノ・ドラッツィオ著;上野真弓訳. レオナルド・ダ・ヴィンチの秘密. 河出書房新社, 2016, 9784309255668

6) 田中英道, モナ・リザは、なぜ微笑むのか. PHP 研究所, 2008, 9784569657721 (犬山 723)

7) 西岡文彦, 図説名画の歴史. 新装版, 河出書房新社, 2019, 9784309762807 (犬山 723)

8) 宮下規久朗, 知識ゼロからのルネサンス絵画入門. 幻冬舎, 2012, 9784344902589 (犬山 723)

9) 仲川与志・西永裕, 図説名画の誕生 ルネサンス絵画入門. 秀和システム, 2018, 9784798050768 (犬山 723)

10) 秋田麻早子, 絵を見る技術. 朝日出版社, 2019, 9784255011110 (犬山 720)

11) ペン編集部, ダ・ヴィンチ全作品・全解剖. 阪急コミュニケーションズ. 2009, 9784484092126

12) 片桐頼継, レオナルド・ダヴィンチ 復活『最後の晩餐』. 小学館. 1999, 4096060216 (名経大 723.8/L55, 犬山 723)

13) 杉全美帆子, イラストで読むレオナルド・ダ・ヴィンチ. 河出書房新社, 2012, 9784309255453

犬山市立図書館×名古屋経済大学図書館 連携事業
「レオナルド・ダ・ヴィンチ展 ―没後500年―」 図録
2019年11月20日 発行
名古屋経済大学図書館

〒484-0000 愛知県犬山市字樋池61―22
TEL: 0568-67-3798(直)／FAX: 0568-67-9321
E-mail: toshokan@kan.nagoya-ku.ac.jp